

釈子日蓮述

夫それ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし。過去の大通智勝仏は出世し給ひて十小劫が間一経も説き給はず。経に云はく「一坐十小劫」と。又云はく「ほとけ仏時未だ至らずと知ろしめして請ひを受けて黙然もくねんとして坐したまへり」等云云。今の教主釈尊は四十余年の程、法華経を説き給はず。経に云はく「説時未だ至らざるが故なり」云云。老子は母の胎たいに処して八十年、弥勒菩薩みろく とそつは兜率の内院こもに籠らせ給ひて五十六億七千万歳をまち給うべし。彼の時鳥ほととぎすは春ををくり、鷄鳥にわとりは暁をまつ。畜生猶すらなをかくのごとし。何に況んや、仏法を修行せんただに時を糾さざるべしや。

寂滅道場の砌じゃくめつ みぎりには十方の諸仏示現し、一切の大菩薩集しゅうえ会し給ひ、梵・帝・四天は衣をひるがへし、竜神八部たなごころは掌を合はせ、凡夫大根性の者は耳をそばだて、生身得忍の諸菩薩・解脱月等請げだつがつ しょうをなし給ひしかども、世尊は二乗作仏・久遠実成をば名字をかくし、即身成仏・一念三千の肝心其の義を宣べ給はず。此等ひとえは偏にこれ機は有りしかども時の来たらざればのべさせ給はず。経に云はく「説時未だ至らざるが故なり」等云云。靈山会上の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ、五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる。決定けつじょうしよく性の成仏はい焦れる種の花さき果このみなり、久遠実成は百歳おきなの叟二十五の子となれるかとうたがふ。一念三千は九界即仏界、仏界即九界と談ず。されば此の経の一字は如意にょい宝珠ほうじゆなり。一句は諸仏の種子となる。此等ひとえは機の熟不熟はさておきぬ、時の至れるゆへなり。経に云はく「今まさ正しく是これ其の時なり、決定して大乘を説く」等云云。

問うて云はく、機にあらざるに大法を授けられれば、愚人は定めて誹謗をなして悪道に墮つるならば、豈説く者の罪あににあらずや。答へて云はく、人路をつくる、路に迷ふ者あり、作る者の罪となるべしや。良医薬を病人にあたう、病人嫌ひて服せずして死せば、良医の失となるか。尋ねて云はく、法華経の第二に云はく「無智の人の中にして此の経を説くこと莫れ」と。同じき第四に云はく「分布して妄りに人に授与すべからず」と。同じき第五に云はく「此の法華経は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸経の中に於て最も其の上みだに在り、長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云云。此等の経文は機にあらざれば説かざれというかいかん。今反詰して云はく、不軽品ふきようほんに云はく「而も是の言ことばを作さく、我深く汝等を敬ふ等云云。四衆の中に瞋恚しんにを生じ心不浄なる者有り。悪口罵詈あつくめりして言はく、是の無智の比丘」と。又云はく「衆人しゆにん或は杖木瓦石じょうもくがしゃくを以て之を打擲ちようちやくす」等云云。勸持品に云はく「諸の無智の人の悪口罵詈等し、及び刀杖とうじょうを加ふる者有らん」云云。此等の経文は悪口罵詈乃至打擲すれどもととかれて候は、説く人の失となりけるか。求めて云はく、此の両説は水火なり。いかんが心うべき。答へて云はく、天台云はく「時に適かな

ふのみ」と。章安云はく「取捨宣しきを得て一向にすべからず」等云云。釈の心は、或時は謗じぬべきにはしばらくとせず、或時は謗ずとも強ひて説くべし、或時は一機は信ずべくとも万機謗ずべくばとくべからず、或時は万機一同に謗ずとも強ひて説くべし。

初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵・文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵・帝・四天等の凡夫大根性の者かすをしらず。鹿野苑の苑には俱隣等の五人、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八万の諸天、方等大会の儀式には世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに恋せさせ給ひしかば、仏宮に入らせ給ひて觀仏三昧経をとかせ給ひ、悲母の御ために切利天に九十日が間籠らせ給ひしには摩耶経をとかせ給ふ。慈父悲母などにはいかなる秘法か惜しませ給ふべき。なれども法華経をば説かせ給はず。せんずるところ機にはよらず、時いたらざればいかにもとかせ給はぬにや。

問うて云はく、何なる時にか小乗権経をとき、何なる時にか法華経を説くべきや。答へて云はく、十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで、時と機とをば相知りがたき事なり。何に況んや我等は凡夫なり。いかでか時機をしるべき。求めて云はく、すこしも知る事あるべからざるか。答へて云はく、仏眼をかつて時機をかんがへよ。仏日を用て国をてらせ。問うて云はく、其の心如何。答へて云はく、大集経に大覺世尊、月蔵菩薩に對して未來の時を定め給えり。所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固、次の五百年には禅定堅固、次の五百年には讀誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固、次の五百年には我が法の中に於て鬪諍言訟して白法隱没せん等云云。此の五の五百歳、二千五百余年に人々の料簡さまざまなり。漢土の道綽禪師が云はく、正像二千、四箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛んなるべし。末法に入つては彼等の白法皆消滅して、淨土の法門念仏の白法を修行せん人計り生死をはなるべし。日本国の法然が料簡して云はく、今日本国に流布する法華経・華嚴経並びに大日経・諸の小乗経、天台・真言・律等の諸宗は、大集経の記文の正像二千年の白法なり。末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし。設ひ行ずる人ありとも一人も生死をはなるべからず。十住毘婆沙論と曇鸞法師の難行道、道綽の未有一人得者、善導の千中無一これなり。彼等の白法隱没の次には淨土の三部経・弥陀称名の一行計り大白法として出現すべし。此を行ぜん人々はいかなる悪人愚人なりとも、十即十生・百即百生、唯淨土の一門のみ有つて通入すべき路なりとはこれなり。されば後世を願はん人々は叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御歸依をとめて、彼の寺山によせをける田畠郡郷を奪いとて念仏堂につけば、決定往生南無阿弥陀仏とすゝめければ、我が朝一同に其の義になりて今に五十余年なり。日蓮此等の悪義を難じやぶる事は事ふり候ひぬ。彼の大集経の白法隱没の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱没の次には法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の内に八万の国あり、其の国々に八万の王あり、王々ごとに臣下並びに万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々に唱ふるがごとく、広

宣流布せさせ給ふべきなり。

問うて云はく、其の証文如何。答へて云はく、法華經の第七に云はく「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云。經文は大集經の白法隱没の次の時をとかせ給ふに、広宣流布と云云。同第六の巻に云はく「惡世末法の時、能く是の經を持たん者は」等云云。又第五の巻に云はく「後の末世の法滅せんと欲する時に於て」等。又第四の巻に云はく「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と。又第五の巻に云はく「一切世間に怨多くして信じ難し」と。又第七の巻に第五の五百歳鬪諍堅固の時を説いて云はく「惡魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得るなり」と。大集經に云はく「我が法の中に於て鬪諍言訟せん」等云云。法華經の第五に云はく「惡世の中の比丘」。又云はく「或は阿蘭若に有り」等云云。又云はく「惡鬼其の身に入る」等云云。文の心は第五の五百歳の時、惡鬼の身に入れる大僧等国中に充滿せん。其の時に智人一人出現せん。彼の惡鬼の入れる大僧等、時の王臣・万民等を語らひて、惡口罵詈、杖木瓦礫、流罪死罪に行なはん時、釈迦・多宝・十方の諸仏、地涌の大菩薩らに仰せつけ、大菩薩は梵・帝・日月・四天等に申しくだされ、其の時天変地天盛んなるべし。国主等其のいさめを用ひずば、隣国にをほせつけて彼々の国々の惡王惡比丘等をせめらるゝならば、前代未聞の大鬪諍一閻浮提到起るべし。其の時日月所照の四天下の一切衆生、或は国ををしみ、或は身ををしむゆへに、一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば、彼のにくみつる一の小僧を信じて、無量の大僧等、八万の大王等、一切の万民、皆頭を地につけ掌を合はせて一同に南無妙法蓮華經ととなうべし。例せば神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向かつて大音声をはなちて、南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

問うて云はく、經文は分明に候。天台・妙樂・伝教等の未来記の言はありや。答へて云はく、汝が不審逆さまなり。釈を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられたれ。經文に分明ならば釈を尋ぬべからず。さて釈の文、經に相違せば經をすてゝ釈につくべきか如何。彼云はく、道理至極せり。しかれども凡夫の習ひ、經は遠し釈は近し。近き釈分明ならば、いますこし信心をますべし。今云はく、汝が不審ねんごろなれば少々釈をいだすべし。天台大師云はく「後の五百歳遠く妙道に沾はん」と。妙樂大師云はく「末法の初め冥利無きにあらず」と。伝教大師云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り、法華一乘の機今正しく是其の時なり。何を以て知ることを得ん。安樂行品に云はく、末世法滅の時なり」と。又云はく「代を語れば則ち像の終はり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・鬪諍の時なり、經に云はく、猶多怨嫉況滅度後と、此の言良に以有るなり」云云。夫釈尊の出世は住劫第九の滅、人壽百歳の時なり。百歳と十歳との中間在世五十年滅後二千年と一万年となり。其の中間に法華經の流布の時二度あるべし。所謂在世の八年、滅後には末法の始めの五百年なり。

而るに天台・妙樂・伝教等は進んでは在世法華の御時にももれさせ給ひぬ。退いては滅後末法の時にも生まれさせ給はず。中間なる事をなげかせ給ひて末法の始めをこひさせ給ふ御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生まれさせ給ひしを見て悲しんで云はく、現生には九十にあまれり、太子の成道を見るべからず、後生には無色界に生まれて五十年の説法の座にもつらなるべからず、正像末にも生まるべからずとなげきしがごとし。道心あらん人々は此を見きゝて悦ばせ給へ。正像二千年の大王よりも、後世ををものはん人々は、末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信ぜざらんや。彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱ふる癩人とはなるべし。梁の武帝の願に云はく「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも、鬱頭羅弗とはならじ」云云。

問うて云はく、竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや。答へて云はく、竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給ふとはいへども、言には此の義を宣べ給はず。求めて云はく、いかなる故にか宣べ給はざるや。答へて云はく、多くの故あり。一には彼の時には機なし、二には時なし、三には迹化なれば付嘱せられ給はず。求めて云はく、願はくは此の事よくよくきかんとをもう。答へて云はく、夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始めなり。迦葉尊者仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年、次に商那和修二十年、次に優婆崛多二十年、次に提多迦二十年、已上一百年が間は但小乗經の法門をのみ弘通して、諸大乘經は名字もなし。何に況んや法華經をひろむべしや。次には彌遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の四・五人、前の五百余年が間は大乘經の法門少々出来せしかども、とりたてゝ弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ。已上大集經の先の五百年、解脱堅固の時なり。

正法の後の六百年已後一千年が前、其の中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子等の十余人の人々、始めには外道の家に入り、次には小乗經をきわめ、後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんざんに破し失ひ給ひき。此等の大士等は諸大乘經をもて諸小乗經をば破せさせ給ひしかども、諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかゝせ給はず。設ひ勝劣をすこしかゝせ給ひたるやうなれども、本迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず。但或は指をもつて月をさすがごとくし、或は文にあたりてひとはし計りかゝせ給ひて、化道の始終・師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみへず。此等は正法の後の五百年、大集經の禪定堅固の時にあたり。正法一千年の後は月氏に仏法充滿せしかども、或は小をもて大を破し、或は權經をもつて実經を隠没し、仏法さまざまに乱れしかば得道の人やうやく少なく、仏法につけて悪道に墮つる者かずをしらず。

正法一千年の後、像法に入って一十五年と申せしに、仏法東に流れて漢土に入りきに。像法の前五百年の内、始めの一百余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事定まらず。設ひ定まりたりしかども仏法を信ずる人の心いまだふかゝらず。而るに

仏法の中に大小・権実・顯密をわかつならば、聖教一同ならざる故、疑ひをこりて、かへりて外典とともなう者もありぬべし。これらのをそれあるかのゆへに摩騰・竺蘭は自らは知って而も大小を分かつたず、権実をいはずしてやみぬ。其の後、魏・晋・宋・齊・梁の五代が間仏法の内に大小・権実・顯密をあらそひし程に、いづれこそ道理ともきこえずして、上一人より下万民にいたるまで不審すくなからず。南三北七と申して仏法十流にわかれぬ。所謂南には三時・四時・五時、北には五時・半滿・四宗・五宗・六宗・二宗の大乗・一音等、各々義を立て、辺執水火なり。しかれども大綱は一同なり。所謂一代聖教の中には華嚴經第一、涅槃經第二、法華經第三なり。法華經は阿含・般若・淨名・思益等の經々に対すれば真実なり、了義經・正見なり。しかりといえども涅槃經に対すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云。漢より四百余年の末、五百年に入って陳隋二代に智顛と申す小僧一人あり。後には天台智者大師と号したてまつる。南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華經第一、涅槃經第二、華嚴經は第三なり等云云。此れ像法の前の五百歳、大集經の讀誦多聞堅固の時にあひあたれり。

像法の後の五百歳は唐の始め太宗皇帝の御宇に玄奘三蔵、月支に入つて十九年が間、百三十箇国の寺塔を見聞して多くの論師に値ひたてまつりて、八万聖教十二部經の淵底を習ひきわめしに、其の中に二宗あり、所謂法相宗・三論宗なり。此の二宗の中に法相大乘は遠くは弥勒・無著、近くは戒賢論師に伝へて、漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給ふ。此の宗の心は、仏教は機に随ふべし、一乘の機のためには三乘方便・一乘真実なり、所謂法華經等なり、三乘の機のためには三乘真実・一乘方便、所謂深密經・勝鬘經等此なり。天台智者等は此の旨を弁へず等云云。而も太宗は賢王なり。當時名を一天にひゞかすのみならず、三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひゞき、漢土を手くにぎるのみならず、高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし、内外を極めたる王ときこえし賢王の第一の御帰依の僧なり。天台宗の学者の中にも頸をさしいだす一人もなし。而れば法華經の実義すでに一國に隱没しぬ。同じき太宗の太子高宗、高宗の継母則天皇后の御宇に法蔵法師と云ふ者あり。法相宗に天台宗のをそわるゝところを見て、前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出だして、一代の中には華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立てけり。太宗第四代玄宗皇帝の御宇、開元四年と同八年に、西天印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日經・金剛頂經・蘇悉地經を持て渡り真言宗を立つ。此の宗の立義に云はく、教に二種あり、一には釈迦の顯教、所謂華嚴・法華等。二には大日の密教、所謂大日經等なり。法華經は顯教の第一なり。此の經は大日の密教に対すれば極理は少し同じけれども、事相の印契と真言とはたえてみへず。三密相應せざれば不了義經等云云。已上法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども、天台大師程の智人法華宗の中になかりけるかの間、内々はゆはれなき由は存じけれども、天台のごとく公場にして論ぜられざりければ、上国王大臣、下一切の人民にいたるまで、皆仏法に迷ひて衆生の得道みなとゞまりけり。此等は像法の後の五百年の前二百余年が

内なり。

像法に入って四百余年と申しけるに、百濟国くだらより一切經並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる。漢土の梁りょうの末、陳ちんの始めにあひあたる。日本には神武天王よりは第三十代、欽明天王ぎんめいの御宇なり。欽明の御子、用明の太子に上宮王子じょうくう仏法を弘通し給ふのみならず、並びに法華經・淨名經・勝鬘經しょうまんを鎮護国家の法と定めさせ給ひぬ。其の後人王第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗かんろくを觀勒僧正百濟国よりわたす。同じき御代どうしやうに道昭法師漢土より法相宗・俱舎宗をわたす。人王第四十四代元正天王の御宇てんじくに天竺より大日經をわたして有りしかども、而も弘通せずして漢土へかへる。此の僧をば善無畏三蔵という。人王第四十五代に聖武天王の御宇に、審祥大徳新羅国より華嚴宗をわたして、良弁僧正ろうべん聖武天王にさづけたてまつりて、東大寺の大仏を立てさせ給えり。同じき御代がんにんに大唐の鑑真和尚天台宗と律宗をわたす。其の中に律宗をば弘通し、小乗の戒場を東大寺に建立せしかども、法華宗の事をば名字をも申し出ださせ給はずして入滅し了んぬ。其の後人王第五十代、像法八百年に相当たつて桓武天王の御宇に最澄と申す小僧出来せり。後には伝教大師と号したてまつる。始めには三論・法相・華嚴・俱舎・成実・律の六宗、並びに禅宗等を行表僧正等に習学せさせ給ひし程に、我と立て給へる国昌寺、後には比叡山と号す。此にして六宗の本經本論と宗々の人師の釈とを引き合はせて御らむ覽ありしかば、彼の宗々の人師の釈、所依の經論に相違せる事多き上、僻見びやっけん多々にして信受せん人皆惡道に墮ちぬべしとかんがへさせ給ふ。其の上法華經の実義は宗々の人々我も得たり我も得たりと自讚ありしかども其の義なし。此を申すならば喧嘩出来すべし。もだして申さずば仏誓にそむきなんと、をもひわづらわせ給ひしかども、終に仏の誠めををそれて桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝みかど此の事ををどろかせ給ひて六宗の碩学せきがくに召し合はさせ給ふ。彼の学者等始めは慢幢山まんどうのごとし、惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にしてせめをとされ、六宗七寺一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師、陳殿ちんでんにして天台大師にせめをとされて御弟子となりしがごとし。此は是、円定・円慧計りなり。其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし、六宗の八大徳ほんもつに梵網經の大乗別受戒をさづけ給ふのみならず、法華經の円頓えんどんの別受戒を叡山に建立せしかば、延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず、仏の滅後一千八百余年が間身毒けんどく・尸那しな・一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒日本国に始まる。されば伝教大師は、其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ、天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり。されば日本国の当世の東寺・園城・七大寺・諸国の八宗、淨土・禅宗・律等の諸僧等、誰人か伝教大師の円戒をそむくべき。かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子似ににたれども、円頓一同の戒場は漢土になければ、戒於をいては弟子とならぬ者もありけん。この日本国は伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり惡人なり。而れども漢土日本の天台宗と真言の勝劣は大師、心中には存知せさせ給ひけれども、六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆへにや、伝教大師已後に

は東寺・七寺・園城の諸寺、日本一州一同に、真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをばしめしをもえり。しかれば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける。此の伝教の御時は像法の末、大集經の多造塔寺堅固の時なり。いまだ於我法中・鬪諍言訟・白法隱没の時にはあたらず。

今末法に入って二百余歳、大集經の於我法中・鬪諍言訟・白法隱没の時にあたれり。仏語まことならば定んで一閻浮提に鬪諍起こるべき時節なり。伝へ聞く、漢土は三百六十箇国二百六十余州はすでに蒙古国に打ちやぶられぬ。花落すでにやぶられて、徽宗・欽宗の両帝北蕃にいけどりにせられて、鞦韆にして終にかくれさせ給ひぬ。徽宗の孫、高宗皇帝は長安をせめをとされて、田舎の臨安行在府に落ちさせ給ひて、今に数年が間京をみず。高麗六百余国も新羅・百濟等の諸国等も、皆大蒙古国の皇帝にせめられぬ。今の日本国の壱岐・対馬並びに九国のごとし。鬪諍堅固の仏語地に墮ちず、あたかもこれ大海のしをの時をたがへざるのごとし。是をもって案ずるに、大集經の白法隱没の時に次いで、法華經の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか。彼の大集經は仏説の中の権大乘ぞかし。生死をはなるゝ道には、法華經の結縁なき者のためには未顕真実なれども、六道・四生・三世の事を記し給ひけるは寸分もたがわざりけるにや。何に況んや法華經は釈尊は要当説真実となのらせ給ひ、多宝仏は真実なりと御判をそへ、十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給ひて、後五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと、梵・帝・日・月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は来たらずとも、日は東へかへるとも、月は地に落つるとも此の事は一定なるべし。

此の事一定ならば、鬪諍堅固の時、日本国の王臣と並びに万民等が、仏の御使ひとして南無妙法蓮華經を流布せんとするを、或は罵詈し、或は悪口し、或は流罪し、或は打擲し、弟子眷属等を種々の難にあわする人々いかでか安穩にては候べき。これをば愚癡の者は呪詛すとをいぬべし。法華經をひろむる者は日本の一切衆生の父母なり。章安大師云はく「彼が為に悪を除くは即ち是彼が親なり」等云云。されば日蓮は当帝の父母、念佛者・禅衆・真言師等が師範なり、又主君なり。而るを上一人より下万民にいたるまであだをなすをば日月いかでか彼等の頂を照らし給ふべき。地神いかでか彼等の足を戴せ給ふべき。提婆達多は仏を打ちたてまつりしかば、大地揺動して火炎いでにき。檀弥羅王は師子尊者の頭を切りしかば、右の手刀とともに落ちぬ。徽宗皇帝は法道が面になやきをやきて江南にながせしかば、半年が内にえびすの手にかゝり給ひき。蒙古のせめも又かくのごとくなるべし。設ひ五天のつわものをあつめて、鉄圍山を城とせりともかなうべからず。必ず日本国の一切衆生兵難に値ふべし。されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかはこれにて見るべし。教主釈尊記して云はく、末代悪世に法華

經を弘通するものを悪口罵詈等せん人は、我を一劫が問あだせん者の罪にも百千万億倍  
すぎたるべしととかせ給へり。而るを今の日本国の国主万民等雅意にまかせて、父母宿  
世の敵よりもいたくにくみ、謀反殺害の者よりもつよくせめぬるは、現身にも大地わ  
れて入り、天雷も身をさかざるは不審なり。日蓮が法華經の行者にてあらざるか。もし  
しからばを<sup>大</sup>きになげかし。今生には万人にせめられて片時もやすからず、後生には悪  
道に墮ちん事あさましとも申すばかりなし。又日蓮法華經の行者ならずば、いかなる者  
の一乗の持者にてはあるべきぞ。法然が法華經をなげすてよ、善導が千中無一、道綽が  
未有一人得者と申すが法華經の行者にて候べきか。又弘法大師の云はく、法華經を行  
ずるは戲論なりとか<sup>けるん</sup>れたるが法華經の行者なるべきか。經文には能持是經、能說此經  
などこそとかれて候へ。よくとくと申すはいかなるぞと申すに、於諸經中<sup>のうじぜきょうのうせつしきょう</sup>最在其上  
と申して大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこ  
そ、經文には法華經の行者とはとかれて候へ。もし經文のごとくならば日本国に仏法わた  
て七百余年、伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし。いかにいかに  
とをもうところに、頭破作七分口則閉塞のなかりけるは道理にて候ひけるなり。此等は  
浅き罰なり。但一人二人等のことなり。日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。此をそし  
り此をあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし。これは日本国を<sup>振</sup>ふりゆるが  
す<sup>しょうか</sup>正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。此等をみよ。仏滅後の後、仏法  
を行ずる者にあだをなすといえども、今のごとくの大難は一度もなきなり。南無妙法蓮  
華經と一切衆生にす<sup>すいせい</sup>めたる人一人もなし。此の徳はたれか一天に眼を合はせ、四海に  
肩をならぶべきや。

疑って云はく、設ひ正法の時は仏の在世に対すれば根機劣なりとも、像末に対すれば  
最上の上機なり。いかでか正法の始めに法華經をば用ひざるべき。随って馬鳴・竜樹  
・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ。天親菩薩は千部の論師、法  
華論を造りて諸經の中第一の義を存す。真諦三蔵の相伝に云はく、月支に法華經を弘通  
せる家五十余家、天親は其の一なりと。已上正法なり。像法に入つては天台大師像法の  
半ばに漢土に出現して玄と文と止との三十巻を造りて法華經の淵底を極めたり。像法の  
末に伝教大師日本に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘通せしむるの  
みならず、円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして、上一人  
より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給ふは、豈に像法の時法華經の広宣流布にあらず  
や。答へて云はく、如来の教法は必ず機に随ふという事は世間の学者の存知なり。しか  
れども仏教はしからず。上根上智の人のために必ず大法を説くならば、初成道の時な  
んぞ法華經をとかせ給はざる。正法の先五百余年に大乘經を弘通すべし。有縁の人に  
大法を説かせ給ふならば、淨飯大王・摩耶夫人に觀仏三昧經・摩耶經をとくべからず。  
無縁の悪人謗法の者に秘法をあたえずば、覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづく  
べからず。不輕菩薩は誹謗の四衆に向かつていかに法華經をば流通せさせ給ひしぞ。さ



れば機に随って法を説くと申すは大なる 僻見<sup>びやっけん</sup>なり。

問うて云はく、竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給はずや。答へて云はく、宣べ給はず。問うて云はく、何なる教をか<sup>いか</sup>の<sup>言</sup>べ給ひし。答へて云はく、華嚴・方等・般若・大日經等の権大乘、顯密の諸經をのべさせ給ひて、法華經の法門をば宣べさせ給はず。問うて云はく、何をもってこれをするや。答へて云はく、竜樹菩薩の所造の論三十万偈。而れども尽くして漢土日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども、漢土にわたれる十住毘婆沙論<sup>びばしゃろん</sup>・中論・大論等をもって天竺の論をも比知して此を知るなり。疑って云はく、天竺に残れる論のなかに、わたれる論よりも勝れたる論やあるらん。答へて云はく、竜樹菩薩の事は私に申すべからず。仏記し給ふ、我が滅後に竜樹菩薩と申す人南天竺に出づべし。彼の人<sup>け</sup>の所詮は中論という論に有るべしと仏記し給ふ。随って竜樹菩薩の流、天竺に七十家あり。七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人々は皆中論を本とす。中論四卷二十七品の肝心は因縁所<sup>しよしよほう</sup>生法の四句の偈なり。此の四句の偈は華嚴・般若等の四教三諦の法門なり。いまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず。疑って云はく、汝がごとく料簡せる人ありや。答へて云はく、天台云はく「中論を以て<sup>あいひ</sup>相比すること莫れ」と。又云はく「天親竜樹内鑑冷然にして外は時の宜しきに適ふ」等云云。妙樂云はく「若し<sup>はえ</sup>破会を論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云。從義の云はく「竜樹天親未だ天台に若かず」云云。

問うて云はく、唐の末に不空三蔵一卷の論をわたす。其の名を菩提心論となづく。竜猛菩薩<sup>りゅうみょう</sup>の造なり云云。弘法大師云はく「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」云云。答へて云はく、此の論一部七丁あり。竜猛の言ならぬ事処々に多し。故に目録にも或は竜猛或は不空と両方なり。いまだ事定まらず。其上此の論の文は一代を括れる論にもあらず。荒量<sup>こうりょう</sup>なる事此多し。先づ唯真言法中の肝心の文あやまりなり。其の故は文証現証ある法華經の即身成仏をばなきになして、文証も現証もあとかたもなき真言の經に即身成仏を立て候。又唯という唯の一字は第一のあやまりなり。事のていを見るに不空三蔵の私につくりて候を、時の人<sup>重</sup>にをもくせせんがために事を竜猛によせたるか。其上不空三蔵は誤る事<sup>多</sup>かずをほし。所謂法華經の觀智の儀軌に、寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見。陀羅尼品を神力品の次にをける、囑累品を經末に下せる、此等はいつかひなし。さるかと思れば、天台の大乘戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し五台山の五寺に立てたり。而も又真言の教相には天台宗をすべしといえり。かたがた<sup>おうわく</sup>誑惑の事どもなり。他人の訳ならば用ふる事もありなん。此の人の訳せる經論は信ぜられず。総じて月支より漢土に經論をわたす人、旧訳新訳に一百八十六人なり。羅什三蔵一人を除いてはいづれの人々も誤らざるはなし。其の中に不空三蔵は殊に誤り多き上、誑惑の心<sup>あらわ</sup>顯なり。疑って云はく、何をもって知るぞや、羅什三蔵より外の人々はあやまりなりとは。汝が禅宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず、漢土日本にわたる一切の訳者を用ひざるかいかん。答へて云はく、此の事は余が第一の<sup>ひじ</sup>秘事なり。委細には向かつて

問ふべし。但しすこし申すべし。羅什三蔵の云はく、我漢土の一切經を見るに皆梵語のごとくならず。いかでか此の事を躡はずべき。但し一つの大願あり。身を不淨になして妻を帯すべし。舌計り清淨になして仏法に妄語せじ。我死せば必ずやくべし。焼かん時、舌焼くるならば我が經をすてよと、常に高座にしてとかせ給ひしなり。上一人より下万民にいたるまで願して云はく、願はくは羅什三蔵より後に死せんと。終に死し給ひて後、焼きたてまつりしかば、不淨の身は皆灰となりぬ。御舌計り火中に青蓮華生ひて其の上にあり。五色の光明を放ちて夜は昼のごとく、昼は日輪の御光をうばい給ひき。さてこそ一切の訳人の經々は軽くなりて、羅什三蔵の訳し給へる經々、殊に法華經は漢土にはやすやすとひろまり候ひしか。疑って云はく、羅什已前はしかるべし。已後の善無畏・不空等は如何。答へて云はく、已後なりとも訳者の舌の焼くるをば誤りありけりとしるべし。されば日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責めさせ給ひしには、羅什三蔵は舌焼けず、玄奘・慈恩は舌焼けぬとせめさせ給ひしかば、桓武天王は道理とをばして天台法華宗へはうつらせ給ひしなり。涅槃經の第三・第九等をみまいらすれば、我が仏法は月支より他国へわたらんの時、多くの謬誤出来して衆生の得道うすかるべしととかれて候。されば妙樂大師は「並びに進退は人に在り何ぞ聖旨に關はらん」とこそあそばされて候へ。今の人々いかに經のまゝに後世をねがうとも、あやまれる經々のまゝにねがわば得道もあるべからず。しかればとても仏の御とがにはあらしとかれて候。仏教を習ふ法には大小・権實・顯密はさてをく、これこそ第一の大事にては候らめ。

疑って云はく、正法一千年の論師の内心中には法華經の実義の顯密の諸經に超過してあるよしはしろしめしながら、外には宣説せずして但権大乘計りを宣べさせ給ふことはしかるべしとわをばへねども、其の義はすこしきこえ候ひぬ。像法一千年の半ばに天台智者大師出現して、題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし、文句十卷には始め如是我聞より終はり作礼而去にいたるまで、一字一句に因縁・約教・本迹・觀心の四つの釈をならべて又一千枚に尽くし給ふ。已上玄義・文句の二十卷には一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ、十方界の仏法の露一滯も漏らさず、妙法蓮華經の大海に入れさせ給ひぬ。其の上天竺の大論の諸義一点ももらさず、漢土南北の十師の義破すべきをばこれをはし、取るべきをば此を用ふ。其の上、止觀十卷を注して一代の觀門を一念にすべ、十界の依正を三千につゞめたり。此の書の文体は、遠くは月支一千年の間の論師にも超え、近くは尸那五百年の人師の釈にも勝れたり。故に三論宗の吉蔵大師、南北一百余人の先達と長者らをすゝめて、天台大師の講經を聞かんとする状に云はく「千年の興五百の実復今日に在り、乃至南岳の叡聖天台の明哲、昔は三業住持し、今は二尊紹係す。豈止甘露を震旦に灑ぐのみならん、亦当に法鼓を天竺に震ふべし。生知の妙悟、魏・晋より以来、典籍の風謡實に連類無し。乃至禅衆一百余僧と共に智者大師を奉請す」等云云。終南山の道宣律師、天台大師を讚歎して云はく「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く、摩訶衍を説くこと長風の大虚に遊ぶに似たり。仮令

文字の師千群万衆あつて 数 彼の妙弁を尋ねとも能く窮むる者無し、乃至義月を指すに同じ、乃至宗一極に帰す」云云。華嚴宗の法蔵法師、天台を讚して云はく「思禪師・智者等の如きは、神異に感通して迹 登位に参はる。靈山の聴法憶ひ今に在り」等云云。真言宗の不空三蔵・含光法師等、師弟共に真言宗をすて、天台大師に帰伏する物語に云はく、高僧伝に云はく「不空三蔵と 親 り天竺に遊びたるに、彼に僧有り、問うて曰く、大唐に天台の教迹有り、最も邪正を簡び偏円を曉らむるに堪へたり。能く之を訳して將に此の土に至らしむべきや」等云云。此の物語は含光が妙樂大師にかたり給ひしなり。妙樂大師此の物語を聞いて云はく「豈中国に法を失して之を四維に求むるに非ずや。而も此の方識ること有る者少なし。魯人の如きのみ」等云云。身毒国の中に天台三十巻のごとくなる大論あるならば、南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき。これあに像法の中に法華經の実義顯はれて、南閻浮提に広宣流布するにあらずや。答へて云はく、正法一千年像法の前四百年、已上仏滅後一千四百余年に、いまだ論師の弘通し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給ふのみならず、其の声月氏までもきこえぬ。法華經の広宣流布にはにたれども、いまだ円頓の戒壇を立てられず。小乗の威儀をもって円の慧・定に切りつけるは、すこし便りなきににたり。例せば日輪の蝕するがごとし、月輪のかけたるににたり。何にいわうや天台大師の御時は大集經の読誦多聞堅固の時にあひあて、いまだ広宣流布の時にあらず。

問うて云はく、伝教大師は日本国の士なり。桓武の御宇に出世して欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり、天台大師の円慧・円定を撰し給ふのみならず、鑑真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり、叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり。此の大事は仏滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり。内証は竜樹天台等には或は劣るにもや、或は同じくもやあるらん。仏法の人をすべて一法となせる事は、竜樹・天親にもこえ南岳・天台にもすぐれて見えさせ給ふなり。総じては如来御入滅の後一千八百年が間、此の二人こそ法華經の行者にてはをはすれ。故に秀句に云はく「經に云はく、若し須弥を接って他方無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず。乃至若し仏の滅後に悪世の中に於て能く此の經を説かん是則ち為れ難し」等云云。此の經を釈して云はく「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云云。釈の心は賢劫第九の滅、人寿百歳の時より、如来在世五十年、滅後一千四百余年が中間に、高さ十六万八千由旬六百六十二万里の金山を、有る人五尺の小身の手をもって方一寸二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく、雀鳥のとぶよりもはやく鉄圍山の外へなぐる者はありとも、法華經を仏のとかせ給ひしやうに説かん人は末法にはまれなるべし。天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給ひたる人にてはをはすれとなり。天竺の論師はいまだ法華經へゆきつき給はず。漢土の天台已前の人師は或はすぎ或はたらず。慈

恩・法蔵・善無畏等は東を西といひ、天を地と申せる人々なり。此等は伝教大師の自讃にはあらず。去ぬる延暦二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝<sup>みゆき</sup>行幸なりて、六宗七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉基・龍忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・観敏等の十有余人、最澄法師と召し合はせられて宗論ありしに、或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず。皆一同に頭をかたづけ、手をあざう。三論の二蔵・三時・三転法輪、法相の三時・五性、華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相十玄皆大綱をやぶらる。例せば大屋の棟・梁<sup>おおいえ</sup>のをれたるがごとし。十大徳の幔幢も倒れにき。爾の時天子大いに驚かせ給ひて、同二十九日に弘世・国道の両吏<sup>ひろよ</sup>を勅使として、重ねて七寺六宗に仰せ下されしかば、各々帰伏の状を載せて云はく「竊かに天台の玄疏を見れば、総じて釈迦一代の教<sup>くく</sup>を括りて悉く其の趣を顯はすに通ぜざる所無く、独り諸宗に逾え殊に一道を示す。其の中の所説甚深の妙理なり。七箇の大寺・六宗の学生の昔より未だ聞かざる所、曾て未だ見ざる所なり。三論・法相久年の<sup>あらそ</sup>争ひ渙焉として氷のごとく釈け、照然として既に明らかに、猶雲霧を披いて三光を見るがごとし。聖徳の弘化より以降、今に二百余年の間、講ずる所の経論其の数多し。彼此理を争へども其の疑未だ解けず。而るに此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず。蓋し以て此の間の群生未だ円味に応はざるか。伏して<sup>おもみ</sup>惟れば聖朝久しく如来の付を受け、深く純円の機を結び、一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の学者初めて至極を悟る。謂ひつべし、此の界の含靈今よりして後悉く妙円の船に載せ、早く彼岸に済ることを得ると。乃至善議等牽かれて休運に逢ひ乃ち奇詞を聞す。深期に非ざるよりは何をか聖世に託せんや」等云云。彼の漢土の嘉祥等は百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり。今日本の七寺二百余人は伝教大師を聖人とがうしたてまつる。仏滅後二千余年に及んで両国に聖人二人出現せり。其上、天台大師未弘の円頓の大戒を叡山に建立し給う。此豈に像法の末に法華經広宣流布するにあらずや。答へて云はく、迦葉・阿難等の弘通せざる大法、馬鳴・竜樹・提婆・天親等の弘通せる事、<sup>さき</sup>前の難に顯はれたり。又竜樹・天親等の流布し残し給へる大法、天台大師の弘通し給ふ事又難にあられぬ。又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒、伝教大師の建立せさせ給ふ事又顯然なり。但し詮と不審なる事は、仏は説き尽くし給へども、仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の正法、<sup>おもて</sup>経文の面に現前なり。此の深法今末法の始め五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事不審無極なり。

問ふ、いかなる秘法ぞ。先づ名をきゝ、次に義をきかんとをもう。此の事もし実事ならば釈尊の二度世に出現し給ふか。上行菩薩の重ねて涌出せるか。いそぎいそぎ慈悲をたれられよ。彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入つて十九年、法華一乗は方便教、小乘阿含經は眞実教。不空三蔵は身毒に返りて寿量品を阿弥陀仏とかゝれたり。此等は東を西という、日を月とあやまてり。身を苦しめてなにかせん、心に染みてようなし。幸ひ我等末法に生まれて一步をあゆまずして三祇をこえ、頭を虎にかわずして無見頂相

得をえん。答へて云はく、此の法門を申さん事は経文に候へばやすかるべし。但し此の法門には先づ三つの大事あり。大海は広けれども死骸をとゞめず。大地は厚けれども不孝の者をば載せず。仏法には五逆をたすけ、不幸をばすくう。但し誹謗一闡提の者、持戒にして大智なるをばゆるされず。此の三つのわざわひとは所謂念仏宗と禅宗と真言宗となり。一には念仏宗は日本国に充滿して、四衆の口あそびとす。二に禅宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して、一天の明導とをもへり。三に真言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし。叡山・東寺・七寺・園城、或は官主、或は御室、或は長吏、或は檢校なり。かの内侍所の神鏡燼灰となししかども、大日如来の宝印を仏鏡とたのみ、宝剣西海に入りしかども、五大尊をもって国敵を切らんと思へり。此等の堅固の信心は、設ひ劫石はひすらぐともかたぶくべしとはみへず。大地は反覆すとも疑心をこりがたし。彼の天台大師の南北をせめ給ひし時も此の宗いまだわたらず。此の伝教大師の六宗をしえたげ給ひし時ももれぬ。かたがたの強敵をまぬがれて、かへて大法をかすめ失う。其の上传教大師の御弟子、慈覚大師此の宗をとりたてゝ叡山の天台宗をかすめをとして、一向真言宗になししかば、此の人には誰の人か敵をなすべき。かゝる僻見のたよりをえて、弘法大師の邪義をもとがむる人もなし。安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども、只華嚴宗のところ計りとがむるににて、かへて法華経をば大日経に対して沈めはてぬ。たゞ世間のたて入りの者のごとし。

問うて云はく、此の三宗の謬誤如何。答へて云はく、浄土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり。本は三論宗の人、竜樹菩薩の十住毘婆沙論を見て難行道・易行道を立てたり。道綽禅師という者あり。唐の世の者、本は涅槃経をかうじけるが、曇鸞法師が浄土にうつる筆を見て、涅槃経をすてゝ浄土にうつて聖道・浄土の二門を立てたり。又道綽が弟子に善導という者あり、雑行・正行を立つ。日本国に末法に入って二百余年、後鳥羽院の御宇に法然というものあり。一切の道俗をすゝめて云はく、仏法は時機を本とす。法華経・大日経・天台・真言等の八宗九宗、一代の大小顕密権実等の経宗等は、上根上智の正像二千の機のためなり。末法に入つては、いかに功をなして行ずるとも其の益あるべからず。其上弥陀念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず。此わたくしに申すにはあらず。竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづけ、道綽は未有一人得者ときらひ、善導は千中無一となづけたり。此等は他宗なれば御不審もあるべし。慧心の先徳にすぎさせ給へる天台真言の智者は末代にをはすべきか。かれ往生要集にかゝれたり。顕密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず。又三論の永観が十因等のみよ。されば法華真言等をすてゝ一向に念仏せば十即十生百即百生とすゝめければ、叡山・東寺・園城・七寺等始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞、道理かともみへければ、顕真座主落ちさせ給ひて法然が弟子となる。其の上設ひ法然が弟子とならぬ人々も、弥陀念仏は他仏ににるべくもなく口ずさみとし、心よせにをもひければ、日本国皆一同に法然房の弟子と見へけり。此の五十年が間、一天四海一人もなく法然が弟子とな

る。法然が弟子となりぬれば、日本国一人もなく謗法の者となりぬ。譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆の者なり。一人阿鼻に墮ちなば余人墮ちざるべしや。結句は法然流罪をあだみて悪霊となつて、我並びに弟子等をとがせし国主・山寺の僧等が身に入って、或は謀反ををこし、或は悪事をなして、皆関東にほろぼされぬ。わづかにのこれる叡山東寺等の諸僧は、俗男俗女にあなづらるゝこと猿猴えんこうの人にわらわれ、俘囚が童子に蔑如えびすせらるゝがごとし。

禅宗は又此の便を得て持齋等となつて人の眼を迷はかし、たつとげなる気色なれば、いかにひがほうもんをいゝくへども失ともをぼへず。禅宗と申す宗は教外別伝と申して、釈尊の一切経の外に迦葉尊者にひそかにさゝやかせ給えり。されば禅宗をしらずして一切経を習うものは犬の雷いかずちをかむがごとし。猿の月の影をとるににたり云云。此の故に日本国の中に不幸にして父母にすてられ、無礼なる故に主君にかんだうせられ、あるいは若じゃくなる法師等の学文にもものうき、遊女のものぐるわしき本性に叶へる邪法なるゆへに、皆一同に持齋になりて国の百姓をくらう蝗虫いなむしとなれり。しかれば天は天眼をいからかし、地神は身をふるう。

真言宗と申すは上の二つのわざわひにはにるべくもなき大僻見なり。あらあら此を申すべし、所謂大唐げんそうの玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経そしつじを月支よりわたす。此の三経の説相分明なり。其の極理を尋ぬれば会二破二えにはにの一乗、其の相を論ずれば印と真言と計りなり。尚華嚴・般若の三一相對の一乗にも及ばず、天台宗の爾前の別円程もなし。但蔵通二教を面とす。而るを善無畏三蔵をもわく、此の経文を頭言わにいゝ出だす程ならば、華嚴・法相にも鳥游をこづかれ、天台宗にもわらわれなん。大事として月支よりは持ち来たりぬ。さてもたせば本意にあらずとやをもひけん。天台宗の中に一行禅師びやくにんという僻人一人あり。これをかたらひて漢土の法門をかたらせけり。一行阿闍梨うちぬかれて、三論・法相・華嚴等をあらあらかたるのみならず、天台宗の立てられけるやうを申しければ、善無畏をもはく、天台宗は天竺にして聞きしにもなをうちすぐれて、かさむべきやうもなかりければ、善無畏は一行をうちぬひて云はく、和僧は漢土にはこざかしき者にてありけり。天台宗は神妙の宗なり。今真言宗の天台宗にかさむところは印と真言と計りなりといゝければ、一行さもやとをもひければ、善無畏三蔵一行語にかたて云はく、天台大師の法華経しよに疏をつくらせ給へるごとく、大日経の疏を造りて真言を弘通せんともう。汝かきなんやといゝければ、一行が云はく、やすう候。但しいかやうにかき候べきぞ。天台宗はにくき宗なり。諸宗は我も我もとあらそいをなせども一切に叶はざる事一つあり。所謂法華経の序分に無量義経と申す経をもつて、前四十余年の経々をば其の門を打ちふさぎ候ひぬ。法華経の法師品・神力品をもつて後の経々をば又ふせがせぬ。肩をならぶ経々をば今説の文をもつてせめ候。大日経をば三説の中にはいづくにか置をき候べきと問ひければ、爾の時に善無畏三蔵大いに巧たくらんで云はく、大日経に住心品という品あり。無量義経の四十余年の経

々を打ちばらうがごとし。大日經の入曼陀羅已下の諸品は漢土にては法華經・大日經とて二本なれども天竺にては一經のごとし。釈迦仏は舍利弗・弥勒に向かつて大日經を法華經となづけて、印と真言とをすて、但理計りをとけるを、羅什三蔵此をわたす。天台大師此を見る。大日如来は法華經を大日經となづけて金剛薩埵に向かつてとかせ給ふ。此を大日經となづく。我まのあたり天竺にしてこれを見る。されば汝がかくべきやうは、大日經と法華經とをば水と乳とのやふに一味となすべし。もししからば大日經は已今当の三説をば皆法華經のごとくうちをとすべし。さて印と真言とは心法の一念三千に莊嚴するならば三密相應の秘法なるべし。三密相應する程ならば天台宗は意密なり。真言は甲なる將軍の甲鎧を帯して弓箭を横たへ太刀を腰にはけるがごとし。天台宗は意密計りなれば甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといふれば、一行阿闍梨は此のやうにかきけり。漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ、始めには勝劣を諍論しけれども、善無畏等は人がらは重し、天台宗の人々は軽かりけり。又天台大師ほどの智ある者もなかりければ、但日々に真言宗になりてさてやみにけり。年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候ひけり。日本国の伝教大師漢土にわたりて、天台宗をわたし給ひしついでに、真言宗をならべわたす。天台宗を日本の皇帝にさづけ、真言宗を六宗の大徳にならわせ給ふ。但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定めさせ給ふ。入唐已後には円頓の戒場を立てう立てじの論か計りなかりけるかのあいだ、敵多くしては戒場の一事成じがたしとやをぼしめしけん、又末法にせめさせんとやをぼしけん、皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず。弟子等にもはかばかしくかたらせ給はず。但し依憑集と申す一卷の秘書あり。七宗の人々の天台に落ちたるやうをかゝれて候文なり。かの文の序に真言宗の誑惑一筆みへて候。

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値ひ給ひて真言宗をならわせ給へり。御帰朝の後一代の勝劣を判じ給ひけるには、第一真言・第二華嚴・第三法華とかゝれて候。此の大師は世間の人々はもつてのほかに重んずる人なり。但し仏法の事は申すにをそれあれども、もつてのほかにあらき事どもはんべり。此の事をあらあらかんがへたるに、漢土にわたらせ給ひては、但真言の事相の印・真言計り習ひつたえて、其の義理をばくはしくもさばくらせ給はざりけるほどに、日本にわたりて後、大いに世間を見れば天台宗もつてのほかにかさみたりければ、我が重んずる真言宗ひろめがたかりけるかのゆへに、本日本国にして習ひたりし華嚴宗をとりいだして法華經にまされるよしを申しけり。それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば人信ずまじとやをぼしめしけん。すこしいろをかえて、此は大日經、竜猛菩薩の菩提心論、善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども、天台宗の人々いたうとがめ申す事なし。問うて云はく、弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論に云はく「此くの如き乗々自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」と。又云はく「無明の辺域にして明の分位に非ず」と。又云はく「第四熟蘇味なり」と。又云はく「震旦の人師等争って醍醐を盗みて各自宗に名づ

く」等云云。此等の釈の心如何。答へて云はく、予此の釈にをどろひて一切經並びに大日の三部經等をひらきみるに、華嚴經と大日經とに対すれば法華經は戲論、六波羅蜜經に対すれば盜人、守護經に対すれば無明の辺域と申す經文は一字一句も候わず。此の事はいとかなき事なれども、此の三四百年に日本国のそこばくの智者どもの用ひさせ給へば、定んでゆへあるかともひぬべし。しばらくいとやすきひが事をあげて余事のはかなき事をしらすべし。法華經を醍醐味と称することは陳隋の代なり。六波羅蜜經は唐の半ばに般若三藏此をわたす。六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世にはわたりてあらばこそ、天台大師は真言の醍醐をば盗ませ給わめ。傍例あり。日本の得一が云はく、天台大師は深密經の三時教をやぶる、三寸の舌をもって五尺の身をたつべしとのしりしを、伝教大師此をたゞして云はく、深密經は唐の始め、玄奘三藏これをわたす。天台は陳隋の人、智者御入滅の後、数箇年あって深密經わたれり。死して已後にわたれる經をばいかでか破し給ふべきとせめさせ給ひて候ひしかば、得一はつまるのみならず、舌八つにさけて死し候ひぬ。これは彼にはにるべくもなき悪口なり。華嚴の法蔵・三論の嘉祥・法相の玄奘・天台等乃至南北の諸師、後漢より已下の三藏人師を皆をさえて盜人とかゝれて候なり。其上、又法華經を醍醐と称することは天台等の私の言にはあらず。仏涅槃經に法華經を醍醐ととかせ給ひ、天親菩薩は法華經・涅槃經を醍醐とかゝれて候。竜樹菩薩は法華經を妙薬となづけさせ給ふ。されば法華經等を醍醐と申す人盜人ならば、釈迦・多宝・十方の諸仏、竜樹・天親等は盜人にてをはずべきか。弘法の門人等乃至日本の東寺の真言師は如何。自眼の黑白はつたなくして弁へずとも、他の鏡をもって自禍をしれ。此の外法華經を戲論の法とかゝること、大日經・金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ。設ひ彼々の經々に法華經を戲論ととかれたりとも、訳者の誤る事もあるぞかし。よくよく思慮のあるべかりけるか。孔子は九思一言、周公旦は沐には三にぎり、食には三はかれけり。外書のはかなき世間の浅き事を習ふ人すら智人はかう候ぞかし。いかにかゝるあさましき事はありけるやらん。

かゝる僻見の末へなれば彼の伝法院の本願とがうする聖覺房が舍利講の式に云はく「尊高なる者は不二摩訶衍の仏なり。驢牛の三身は車を扶くこと能はず。秘奥なる者は両部曼陀羅の教なり。顯乘の四法は履を採るに堪へず」云云。顯乘の四法と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・華嚴・般若・深密經の教主の四仏、此等の仏僧は真言師に対すれば聖覺・弘法の牛飼ひ、履物取者にもたらぬ程の事なりとかいて候。

彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博学、顯密二道胸にうかべ、内外の典籍掌ににぎる。されば王臣頭をかたづけ、万民師範と仰ぐ。あまりの慢心に、世間に尊崇する者は大自在天・婆藪天・那羅延天・大覺世尊、此の四聖なり、我が座の四足にせんと、座の足につくりて坐して法門を申しけり。当時の真言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて灌頂する時敷まんだらとするがごとし。禪宗の法師等が云はく、此の宗は仏の頂



をふむ大法なりというがごとし。而るを賢愛論師と申せし小僧あり。彼をたゞすべきよし申せしかども、王臣万民これをもちあらず。結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて、無量の妄語をかまへて悪口打擲せしかども、すこしも命もをしまずのゝしりしかば、帝王賢愛をにくみてつめさせんとし給ひしほどに、かへりて大慢がせめられたりしかば、大王天に仰ぎ地に伏してなげいての給はく、朕はまのあたり此の事をきひて邪見をはらしぬ。先王はいかに此の者にたばらかされて阿鼻地獄にをはすらんと、賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給ひしかば、賢愛の御計らひとして大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給ひければ、いよいよ悪心盛んになりて現身に無間地獄に墮ちぬ。今の世の真言と禅宗等とは此にかわれりや。漢土の三階禅師云はく、教主釈尊の法華経は第一第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普経なり。法華経を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻獄に墮つべし。末法の根機にあたらざるゆへなりと申して、六時の礼懺四時の坐禅、生身の仏のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子万余人ありしかども、わづかの小女の法華経をよみしにせめられて、当坐には音を失ひ後には大蛇になりて、そこばくの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食らひしなり。今の善導・法然等が千中無一の悪義もこれにて候なり。

此等の三つの大事はすでに久しくなり候へば、いやしむべきにはあらねども、申さば信ずる人もやありなん。これよりも百千万億倍信じがたき最大の悪事はんべり。慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり。しかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には勝れてをはします人なりとを思えり。此の人真言宗と法華宗の奥義を極めさせ給ひて候が、真言は法華経に勝れたりとかゝせ給へり。而るを叡山三千人の大衆、日本一州の学者等一同帰伏の宗義なり。弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経に劣るとかゝせ給へるは、我がかたながら少し強きやうなれども、慈覚大師の釈をもつてをもうに、真言宗の法華経に勝れたることは一定なり。日本国にして真言宗を法華経に勝ると立つるをば叡山こそ強がたきなりぬべかりつるに、慈覚をもつて三千人の口をふさぎなば真言宗はをもうごとし。されば東寺第一のかたうど、慈覚大師にはすぐべからず。例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも、日本国にしては延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふとも叶ふまじかりしを、安然和尚と申す叡山第一の古徳、教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに、第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云。此の大謬釈につひて禅宗は日本国に充満して、すでに亡国とならんとはするなり。法然が念仏宗のはやりて一国を失はんとする因縁は慧心の往生要集の序よりはじまれり。師子の身の中の虫の師子を食らふと、仏の記し給ふはまことなるかなや。

伝教大師は日本国にして十五年が間、天台真言等を自見せさせ給ふ。生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給ひしかども、世間の不審をはらさんがために、漢土に亘りて天台真言の二宗を伝へ給ひし時、彼の土の人々はやうやうの義ありしかども、我が心には法華は真言にすぐれたりとをぼしめしゆへに、真言宗の宗の名字をば削らせ給ひて、

天台宗の止観真言等かゝせ給ふ。十二年の年分得度の者二人ををかせ給ひ、重ねて止観院に法華經・金光明經・仁王經の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し、永代日本国の第一の重宝神璽・宝剣・内侍所とあがめさせ給ひき。叡山第一の座主義真和尚・第二の座主円澄大師までは此の義相違なし。第三の慈覚大師御入唐、漢土にわたりて十年が間、顯密二道の勝劣を八箇の大徳にならひつたう。又天台宗の人々広修・維縑等にならわせ給ひしかども、心の内にをぼしけるは、真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師伝教大師はいまだ此の事をばくはしく習はせ給はざりけり、漢土に久しくもわたらせ給はざりける故に、此の法門はあらうちにみをはしけるやとをぼして、日本国に帰朝し、叡山の東塔止観院の西に総持院と申す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如来、此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として、金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷已上十四卷をつくる。此の疏の肝心の釈に云はく「教に二種有り。一は顯示教、謂はく三乗教なり。世俗と勝義と未だ円融せざる故に。二は秘密教、謂はく一乗教なり。世俗と勝義と一体にして融する故に。秘密教の中に亦二種有り。一には理秘密教、諸の華嚴・般若・維摩・法華・涅槃等なり。但世俗と勝義との不二を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に。二には事理俱密教、謂はく大日經・金剛頂經・蘇悉地經等なり。亦世俗と勝義との不二を説き亦真言密印の事を説く故に」等云云。釈の心は法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給ふに、真言の三部經と法華經とは所詮の理は同じく一念三千の法門なり。しかれども密印と真言等の事法は法華經かけてをさせず。法華經は理秘密、真言の三部經は事理俱密なれば天地雲泥なりとかゝれたり。しかも此の筆は私の釈にはあらず。善無畏三蔵の大日經の疏の心なりとをぼせども、なをなを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑ひをさんぜんとやをぼしけん。大師慈覚の伝に云はく「大師二經の疏を造り、功を成し已畢って心中に独り謂へらく、此の疏、仏意に通ずるや否や。若し仏意に通ぜざれば世に流傳せじ。仍って仏像の前に安置し七日七夜深誠を翹企し祈請を勤修す。五日の五更に至って夢みらく、正午に当たって日輪を仰ぎ見、弓を以て之を射る。其の箭日輪に当たって日輪即ち轉動す。夢覚めての後深く仏意に通達せりと悟り、後世に伝ふべしと」等云云。慈覚大師は本朝にしては伝教・弘法の両家を習ひきわめ、異朝にしては八大徳並びに南天の宝月三蔵等に十年が間最大事の秘法をきわめさせ給へる上、二經の疏をつくり了り、重ねて本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちをどろかせ給ひ、歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申しそへさせ給ひ、天台の座主を真言の官主となし、真言の鎮護国家の三部とて今に四百余年が間、碩学稻麻のごとし渴仰竹葦に同じ。されば桓武・伝教等の日本国建立の寺塔は一宇もなく真言の寺となりぬ。公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ、官をなし寺をあづけたる。仏事の木画の開眼供養は八宗一同に大日仏眼の印真言なり。

疑って云はく、法華經を真言に勝ると申す人は此の釈をばいかんがせん。用ふべきか

又すつべきか。答ふ、仏の未来を定めて云はく「法に依って人に依らざれ」と。竜樹菩薩云はく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざるは黒論なり」と。天台云はく「復修多羅と合せば録して之を用ひよ。文無く義無きは信受すべからず」と。伝教大師云はく「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」等云云。此等の經・論・釈のごときんば夢を本にはすべからず。たゞついさして法華經と大日經との勝劣を分明に説きたらん經論の文こそたいせちに候はめ。但し印真言なくば木画の像の開眼の事此又をこの事なり。真言のなかりし已前には木画の開眼はなかりしか。天竺・漢土・日本には真言宗已前の木画の像は或は行き、或は説法し、或は御物言あり。印真言をもて仏を供養せしよりこのかた利生もかたがた失せたるなり。此は常の論談の義なり。此の一事にをひては、但し日蓮は分明の証拠を余所に引くべからず。慈覚大師の御釈を仰いで信じて候なり。問うて云はく、何にと信ぜらるゝや。答へて云はく、此の夢の根源は真言は法華經に勝ると造り定めての御ゆめなり。此の夢吉夢ならば慈覚大師の合はせさせ給ふがごとく真言勝るべし。但し日輪を射るとゆめにみたるは吉夢なりというべきか。内典五千七千余巻・外典三千余巻の中に日を射るとゆめにみて吉夢なる証拠をうけ給はるべし。少々これより出だし申さん。阿闍世王は天より月落つるとゆめにみて、耆婆大臣に合はせさせ給ひしかば、大臣合はせて云はく、仏の御入滅なり。須拔多羅天より日落つるとゆめにみる。我とあわせて云はく、仏の御入滅なり。修羅は帝釈と合戦の時、まづ日月をいたてまつる。夏の祭・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる。摩耶夫人は日をはらむとゆめにみて悉達太子をうませ給ふ。かるがゆへに仏の重名をば日種という。日本国と申すは天照太神の日天にしてみますゆへなり。されば此のゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華經をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は愚癡の者なれば經論もしらず。但此の夢をもつて法華經に真言すぐれたりと申す人は、今生には国をほろぼし家を失ひ、後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候。今現証あるべし。日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行なひ候へば、日本かちて候ならば真言はいみじかりけりとをもひ候ひなん。但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候ひしが、調伏せられ給ひし権の大夫殿はかたせ給ひ、後鳥羽院は隱岐の国へ、御子の天子は佐渡の島々へ調伏しやりまいらせ候ひぬ。結句は野干のなきの己が身にをうなるやうに、還著於本人の經文にすこしもたがわず。叡山の三千人かまくらにせめられて、一同にしたがいはてぬ。しかるに又かまくらは、日本を失はんといのるかと申すなり。これをよくよくする人は一閻浮提一人の智人なるべし、よくよくするべきか。今はかまくらの世さかんなるゆへに、東寺・天台・園城・七寺の真言師等と並びに自立をわすれたる法華宗の謗法の人々関東にをちくだりて頭をかたぶけ、ひざをかゞめ、やうやうに武士の心をとりにて、諸寺諸山の別当となり、長吏となりて、王位を失ひし悪法をとりいだして、国土安穩といのれば、將軍家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事なんめりとうちをもひて有るほどに、法華經を失ふ大禍

の僧どもを用ひらるれば、国定めてほろびなん。

亡国<sup>ぼうこく</sup>のかなしさ<sup>ぼうしん</sup>亡身<sup>ぼうしん</sup>のなげかしさに、身命<sup>しんめい</sup>をすて、此の事をあらわすべし。国主世を持つべきならば、あやし<sup>怪</sup>とを思<sup>思</sup>ひて、たづぬべきところに、たゞさんげんのことばのみ用ひて、やうやうのあだをなす。而るに法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天・地神<sup>ちしん</sup>等は古<sup>いにしえ</sup>の謗法をば不思議とはをばせども、此をしれる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつわりをろかなる時もあり、又すこし<sup>摘</sup>つみ<sup>知</sup>しらする時もあり。今は謗法を用ひたるだに不思議なるに、まれまれ<sup>かんぎょう</sup>諫<sup>かんぎょう</sup>曉<sup>かんぎょう</sup>する人<sup>かんぎょう</sup>をかへりてあだをなす。一日二日・一月二月・一年二年ならず数年に及ぶ。彼の<sup>じょうもく</sup>不<sup>じょうもく</sup>輕<sup>じょうもく</sup>菩薩<sup>じょうもく</sup>の杖<sup>じょうもく</sup>木の難<sup>じょうもく</sup>に値<sup>じょうもく</sup>ひしにもすぐれ、覺<sup>かく</sup>徳<sup>とく</sup>比丘<sup>びく</sup>の殺<sup>せつ</sup>害<sup>がい</sup>に及びしにもこえたり。而る間、梵<sup>ぼん</sup>釈<sup>じやく</sup>の二王<sup>にわう</sup>・日月<sup>にげつ</sup>・四天<sup>てん</sup>・衆<sup>しゆ</sup>星<sup>せい</sup>・地<sup>ち</sup>神<sup>しん</sup>等<sup>とう</sup>やうやうにいかり、度々いさめらるれども、いよいよあだをなすゆへに、天の御計らひとして、隣国の聖人にをほせつけられて此をいましめ、大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし、自<sup>じ</sup>界<sup>かい</sup>反<sup>はん</sup>逆<sup>ぎやく</sup>せしむ。吉<sup>きち</sup>凶<sup>きゆう</sup>につけて瑞<sup>きざし</sup>大<sup>きざし</sup>なれば難<sup>きざし</sup>多<sup>きざし</sup>かるべきことわりにて、仏滅後二千二百三十余年が間、いまだいでざる大<sup>だい</sup>長<sup>ちやう</sup>星<sup>せい</sup>、いまだふらざる大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>しん<sup>せい</sup>出来せり。

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありしかども、いまだ日蓮ほど法華經のかたうどして、国土に強敵多くまうけたる者なきなり。まづ眼前の事をもって日蓮は閻浮第一の者とするべし。仏法日本にわたて七百余年、一切經は五千七千、宗は八宗十宗、智人は稻麻のごとし、弘通は竹葦ににたり。しかれども仏には阿彌陀仏、諸仏の名号には彌陀の名号ほどひろまりてをはするは候はず。此の名号を弘通する人は、慧心は往生要集をつくる、日本国三分が一は一同の彌陀念仏者。永觀は十因と往生講の式をつくる、扶桑三分が二分は一同の念仏者。法然はせんちやくをつくる、本朝一同の念仏者。而かれば今の彌陀の名号を唱ふる人々は一人が弟子にはあらず。此の念仏と申すは<sup>そうかん</sup>双<sup>そうかん</sup>觀<sup>そうかん</sup>經<sup>そうかん</sup>・觀<sup>くわん</sup>經<sup>くわん</sup>・阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>經<sup>きやう</sup>の題名なり。權大乘經の題目の<sup>推</sup>広<sup>くわん</sup>宣<sup>くわん</sup>流<sup>くわん</sup>布<sup>くわん</sup>するは、実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は此をすいしぬべし。權經流布せば実經流布すべし。權經の題目流布せば実經の題目又流布すべし。欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと他人をすゝめ、我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来たれば愚王ほろぶ。実經流布せば權經のとゞまり、智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人の此に随はんこと、影と身と声と響とのごとくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし。これをもって<sup>推</sup>す<sup>くわん</sup>い<sup>くわん</sup>せ<sup>くわん</sup>よ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云はく、正<sup>しょう</sup>嘉<sup>か</sup>の大地<sup>だい</sup>しん<sup>せい</sup>文<sup>ぶん</sup>永<sup>えい</sup>の大<sup>だい</sup>彗<sup>すい</sup>星<sup>せい</sup>はいかなる事によって出来せるや。答へて云はく、天台云はく「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云。問うて云はく、心いかん。答へて云はく、上行菩薩の大地より出現し給ひたりしをば、彌勒菩薩・文殊師利菩薩・觀世音菩薩・藥王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人々も、元品の無明を断ぜざれば愚人といわれて、寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、此の

菩薩を召し出だされたとはいらざりしという事なり。問うて云はく、日本・漢土・月支の中に此の事を知る人あるべしや。答へて云はく、見思を断尽し、四十一品の無明を尽くせる大菩薩だにも此の事をしらせ給はず、いかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ども此の事を知るべきか。問うて云はく、智人なくばいかでか此を対治すべき。例せば病の所起を知らぬ人の、病人を治すれば人必ず死す。此の災ひの根源を知らぬ人々がいのりをなさば、国まさに亡びん事疑ひなきか。あらあさましやあさましや。答へて云はく、蛇は七日が内の大雨をしり、鳥は年中の吉凶をしる。此則ち大竜の所従、又久学のゆへか。日蓮は凡夫なり。此の事をしるべからずといえども、汝等にほゞこれをさとさん。彼の周の平王の時、禿にして裸なる者出現せしを、辛有といみし者うらなうて云はく、百年が内に世ほろびん。同じき幽王の時、山川くづれ、大地ふるひき。白陽と云ふ者勘へていはく、十二年の内に大王事に値はせ給ふべし。今の大地震・大長星等は国主日蓮をにくみて、亡国の法たる禅宗と念佛者と真言師をかたうどせらるれば、天いからせ給ひていさせ給ふところの災難なり。問うて云はく、なにをもってか此を信ぜん。答へて云はく、最勝王経に云はく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行なはれず」等云云。此の経文のごときんば、此の国に悪人のあるを王臣此を帰依すという事疑ひなし。又此の国に智人あり。国主此をにくみて、あだすという事も又疑ひなし。又云はく「三十三天の衆咸忿怒の心を生じ、変怪流星墮ち、二つの日俱時に出でて、他方の怨賊来たりて国人喪乱に遭はん」等云云。すでに此の国に天変あり地天あり。他国より此をせむ。三十三天の御いかり有ること又疑ひなきか。仁王経に云はく「諸の悪比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん。其の王別へずして此の語を信聴し」等云云。又云はく「日月度を失ひ、時節反逆し、或は赤日出で、或は黒日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二重四五重輪現ぜん」等云云。文の心は悪比丘等国に充滿して、国王・太子・王子等をたばらかして、破仏法・破国の因縁をとけば、其の国の王等此の人にたばらかされてをばすやう、此の法こそ持仏法の因縁・持国の因縁とをもひ、此の言ををさめて行なふならば日月に変あり、大風と大雨と大火等出来し、次には内賊と申して親類より大兵乱をこり、我がかたうどしぬべき者をば皆打ち失ひて、後には他国にせめられて、或は自殺し、或はいけどりにせられ、或は降人となるべし。是偏に仏法をほろぼし、国をほろぼす故なり。守護経に云はく「彼の釈迦牟尼如来の所有の教法は一切の天魔・外道・悪人・五通の神仙皆乃至少分をも破壊せず。而るに此の名相の諸の悪沙門皆悉く毀滅して余り有ること無からしむ。須弥山を仮使三千界の中の草木を尽くして薪と為し、長時に焚焼すとも一毫も損すること無し、若し劫火起こりて火内より生じ、須臾も焼滅せんには灰燼をも余すこと無きが如し」等云云。蓮華面経に云はく「仏阿難に告げたまはく、譬へば師子の命終せんには若しは空若しは地若しは水若しは陸の所有の衆生敢へて師子の身の穴を食らはず。唯師子自ら諸の虫を生じて自ら師子の

穴を食らふが如し。阿難、我が之の仏法は余の能く壊るに非ず。是我が法の中の諸の悪比丘我が三大阿僧祇劫に積行し勤苦し集むる所の仏法を破らん」等云云。経文の心は過去の迦葉仏、釈迦如来の末法の事を訖哩枳王にかたらせ給ひ、釈迦如来の仏法をばいかなるものかうしなうべき。大族王の五天の堂舎を焼き払ひ、十六大国の僧尼を殺せし、漢土の武宗皇帝の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ、僧尼二十六万五百人を還俗せし等のごとくなる悪人等は釈迦の仏法をば失ふべからず。三衣を身にまとひ、一鉢を頸にかけ、八万法蔵を胸にうかべ、十二部経を口にずうせん僧侶が彼の仏法を失うべし。譬へば須弥山は金の山なり。三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめて、一年二年百千万億年が間やくとも、一分も損ずべからず。而るを劫火をこらん時須弥の根より豆計りの火いでて須弥山をやくのみならず、三千大千世界をやき失うべし。若し仏記のごとくなれば十宗・八宗・内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや。小乗の俱舎・成実・律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり。真言の善無畏等・禅宗の三階等・浄土宗の善導等は仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり。伝教大師は三論・法相・華嚴等の日本の碩徳等を六虫とかゝせ給へり。日蓮は真言・禅宗・浄土等の元祖を三虫となづく。又天台宗の慈覚・安然・慧心等は法華経・伝教大師の師子の身の中の三虫なり。此等の大謗法の根源をたゞす日蓮にあだをなせば、天神もをしみ、地祇もいからせ給ひて、災夭も大いに起こるなり。されば心うべし。一閻浮提第一の大事を申すゆへに最第一の瑞相此にをこれり。あわれなるかなや、なげかしきかなや、日本国の人皆無間大城に墮ちむ事よ。悦ばしきかなや、楽しきかなや、不肖の身として今度心田に仏種をうえたる。

いまにしもみよ。大蒙古国数万艘の兵船をうかべて日本国をせめば、上一人より下万民にいたるまで一切の仏寺・一切の神寺をばなげすて、各々声をつるべて南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱へ、掌を合はせてたすけ給へ日蓮の御房、日蓮の御房とさけび候はんずるにや。例せば月支の大族王は幼日王に掌をあわせ、日本の宗盛は影時をうやまう、大慢のものは敵に随ふという、このことわりなり。彼の軽毀大慢の比丘等は始めには杖木をとゝのへて不軽菩薩を打ちしかども、後には掌をあわせて失をくゆ。提婆達多は釈尊の御身に血をいだししかども、臨終の時には南無と唱へたりき。仏とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを、業ふかくして但南無とのみとなへて仏とはいわず。今日本国の高僧等も南無日蓮聖人ととなえんとすとも、南無計りにてやあらんずらん。ふびんふびん。

外典に云はく、未萌をしるを聖人という。内典に云はく、三世を知るを聖人という。余に三度のかうみやうあり。一つには去にし文応元年<sup>本歲</sup>七月十六日に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿谷の入道に向かつて云はく、禅宗と念仏宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ。此の事を御用ひなきならば、此の一門より事をこりて他国にせめ

られさせ給ふべし。二つには去にし文永八年九月十二日申さるの時に平左衛門尉に向かつて云はく、日蓮は日本国の棟梁とうりょうなり。予を失ふは日本国の柱はしらを倒すなり。只今じに自界かいほんぎやくなん反逆同 士 討難とてどうちして、他国侵逼た かくしんびつなん難とて此の国の人々他国に打ち殺さるゝのみならず、多くいけどりにせらるべし。建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長楽寺等の一切の念仏者・禅僧等が寺塔をば焼やきはらいて、彼等が頸ゆびをゆひのはまにて切らずば、日本国必ずほろぶべしと申し候ひ了んぬ。第三には去年文永十四月八日左衛門尉に語って云はく、王地に生まれれば身をば随へられたてまつるやうなりとも、心をば随へられたてまつるべからず。念仏の無間獄、禅の天魔の所為なる事は疑ひなし。殊に真言宗が此の国土の大なるわざわひにては候なり。大蒙古を調伏せんこと真言師には仰せ付けらるべからず。若し大事を真言師調伏するならば、いよいよいそいで此の国ほろぶべしと申せしかば、頼綱よりつな問ふて云はく、いつごろかよせ候べき。予言はく、経文にはいつとはみへ候はねども、天の御み気色けしきいかりすくなからず、きうに見急へて候。よも今年はすごし候はじと語りたりき。此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず。只偏に釈迦如来の御み神たましい我が身に入りかわせ給ひけるにや。我が身ながらも悦び身にあまる。法華経の一念三千と申す大事の法門はこれなり。経に云はく、所謂諸法如是相と申すは何事ぞ。十如是の始めの相如是きが第一の大事にて候へば、仏は世にいでさせ給ふ。智人は起きをしる蛇はみづから蛇をていしるとはこれなり。一滯あつまりて大海となる。微塵つもりて須弥山となれり。日蓮が法華経を信じ始めしは日本国には一滯一微塵のごとし。法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は此よりほかに又もとむる事なかれ。問ふて云はく、第二の文永八年九月十二日の御勸ご気かんの時きは、いかにとして我を損そんぜば自他の軍いくさを知こるべしとはしり給ふや。答ふ、大集経またに云はく「若し復諸せつりの刹利国王諸なの非法なを作し、世尊の声聞なの弟子を悩乱し、若しは以て毀罵きめし刀杖ちようしゃくをもって打斫し、及び衣鉢種々の資具しきを奪ひ、若しは他の給施きゆうせに留難きゆうせを作す者有らば、我等彼をして自然にわに卒にかに他方の怨敵にわを起さしめ、及び自界の国土にも亦兵起・飢疫飢饉・非時の風雨・鬪争言訟・譏謗せしめ、又其の王をして久しからずして復当に己が国を忘失すべし」等云云。夫諸経に諸文多しといえども、此の経文は身にあたり、時にのぞんで殊ことに尊覚くをばうるゆへに、これをせんじいだす。此の経文に我等とは、梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり。此等の上主仏前けいに詣して誓って云はく、仏の滅後、正法・像法・末代の中に、正法を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうったへば、王に近きもの、王に心よせなる者、我がたつとしとをもう者のいふことなれば、理不尽りふじんに是非を糾さず、彼の智人をさんざん恥と及はぢにをよばせなんどせば、其の故ともなく其の国ににわかたに大兵乱出現し、後には他国にせめらるべし。其の国主も失うせ、其の国もほろびなんずととかれて候。いたひとかゆきとはこれなり。予が身には今生にはさせる失とがなし。但国をたすけんた扶たけん

がため、生国の恩をほうぜんと申せしを、御用ひなからんこそ本意にあらざるに、あま  
さへ召し出だして法華經の第五の巻を懐中せるをとりいだしてさんざんとさいなみ、  
結句はこうちをわたしなんどせしかば申したりしなり。日月天に処し給ひながら、日蓮  
が大難にあうを今度かわらせ給はずば、一には日蓮が法華經の行者ならざるか、  
忽ちに邪見をあらたむべし。若し日蓮法華經の行者ならば忽ちに国にしるしを見せ給へ。若  
ししからずば今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の人なり。提  
婆が虚誑罪、俱伽利が大妄語にも百千万億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと声をあげ  
て申せしかば、忽ちに出来せる自界反逆難なり。

されば国土いたくみだれば、我が身はいうにかひなき凡夫なれども、御經を持ちまい  
らせ候分齊は、当世には日本第一の大人なりと申すなり。問ふて云はく、慢煩惱は七慢  
・九慢・八慢あり。汝が大慢は仏教に明かすところの大慢にも百千万億倍すぐれたり。  
彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず、大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿  
羅漢となのる、無垢論師が五天第一といひし、此等は皆阿鼻に墮ちぬ。無間の罪人なり。  
汝いかでか一閻浮提第一の智人となのれる、大地獄に墮ちざるべしや。をそろしをそろ  
し。答へて云はく、汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや。大覺世尊は三界第一となの  
らせ給ふ。一切の外道が云はく、只今天に罰せらるべし。大地われて入りなん。日本国  
の七寺三百余人が云はく、最澄法師は大天が蘇生か、鉄腹が再誕か等云云。而りといえ  
ども天も罰せず、かへて左右を守護し、地もわれず、金剛のごとし。伝教大師は叡山を  
立て、一切衆生の眼目となる。結句七大寺は落ちて弟子となり、諸国は檀那となる。さ  
れば現に勝れたるを勝れたりという事は慢にて大功徳となりけるか。伝教大師云はく  
「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所依の經に拠るが故に自讃毀他ならず」等云云。法華  
經第七に云はく「衆山の中に須弥山為れ第一なり。此の法華經も亦復是くの如し。諸經  
の中に於て最も為れ其の上なり」等云云。此の經文は已説の華嚴・般若・大日經等、今  
説の無量義經、当説の涅槃經等の五千七千、月支・竜宮・四王天・忉利天・日月の中の  
一切經、尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄圍山・大鉄圍山のごとし。日本国にわた  
らせ給へる法華經は須弥山のごとし。又云はく「能く是の經典を受持すること有らん者  
も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」等云云。此の經文をもって案  
ずるに、華嚴經を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等、竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵大師・  
清涼国師・則天皇后・審祥大徳・良弁僧正・聖武天皇、深密・般若經を持てる勝  
義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・觀勒・道昭・孝徳天  
王、真言宗の大日經を持てる金剛薩埵・竜猛菩薩・竜智菩薩・印生王、善無畏三蔵  
・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・恵果・弘法大師・慈覺大師、涅槃經を持ちし迦  
葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵・光宅寺法雲・南三北七の十師等よりも、末代悪  
世の凡夫の一戒も持たず、一闍提のごとくに人には思はれたれども、經文のごとく已今  
当にすぐれて法華經より外は仏になる道なしと強盛に信じて、而も一分の解なからん人



々は、彼等の大聖には百千億倍のまさりなりと申す経文なり。彼の人々は或は彼の経々にしばら且く人を入れて法華經へうつさんがためなる人もあり、或は彼の経にじやく著をなして法華經へ入らぬ人もあり、或は彼の経々に留逗まるのみならず、彼の経々を深く執するゆへに法華經を彼の経に劣るといふ人もあり。されば今法華經の行者は心うべし。譬へば一切のせんるこうが川流江河の諸水の中に海こ為れ第一なるが如く、法華經を持つ者も亦復是くの如し。又衆星しゆしやうの中に月天子最も為れ第一なるが如く、法華經を持つ者も亦復是くの如し等と御心えあるべし。当世日本国の智人等は衆星のごとし、日蓮は満月のごとし。問うて云はく、いにしえ古かくのごとくいえる人ありや。答へて云はく、伝教大師の云はく「当に知るべし、他宗所依の経は未だ最為第一ならず、其の能く経を持つ者も亦未だ第一ならず。天台法華宗は所持の経最為第一なるが故に、能く法華を持つ者も亦衆生の中の第一なり。已に仏説によ擲る豈自歎哉」等云云。夫驥驎の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといひ、輪王に随へる劣夫の須臾に四天下をめぐるといふをば、難ずべしや疑ふべしや。豈自歎哉の積は肝にめひずるか。若し爾らば、法華經を経のごとくに持つ人は、梵王にもすぐれ帝釈にもこえたり。修羅を随へば須弥山をもにないぬべし。竜をせめつかわば大海をもくみほしぬべし。伝教大師云はく「讚むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」等云云。法華經に云はく「経を讀誦し書持すること有らん者を見てきやうせんぞうしつ輕賤憎嫉して結恨を懷かん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云。教主釈尊の金言まことならば、多宝仏のしょうみやう證明たがわずば、十方の諸仏の舌相一定ならば、今日本国の一切衆生無間地獄に墮ちん事疑ふべしや。法華經の八の巻に云はく「若し後の世に於て是の經典を受持し讀誦せん者は乃至所願むな虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」と。又云はく「若し之を供養し讚歎すること有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云。此の二つの文の中に亦於現世得其福報の八字、当於今世得現果報の八字、已上十六字の文こむなくして日蓮今生に大果報なくば、如来の金言は提婆が虚言に同じく、多宝の証明は俱伽利が妄語に異ならじ。一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず。三世の諸仏もましまさざるか。されば我が弟子等心みに法華經のごとく身命こもをしまし修行して、此の度仏法を心みよ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」と。涅槃經に云はく「譬へば王使の善能談論して方便に巧みなる、命を他国に奉くるに寧ろ身命を喪ふとも終に王の所説の言教を匿さざるが如し。智者も亦爾なり。凡夫の中に於て身命を惜しまず、要必ず大乘方等如来の秘藏一切衆生皆仏性有りと宣説すべし」等云云。いかやうなる事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん。委細にうけ給はり候はん。答へて云はく、予が初心の時の存念は、伝教・弘法・慈覚・智証等の勅宣を給ひて漢土にわたりし事の我不愛身命にあたるか。玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに六生が間身命をほるばしこれ等か。雪山童子の半偈のために身をなげ、薬王菩薩の七万二千歳が間臂ひじを焼きし事かなんども思もひしほどに、経文のごときんば此等にはあらず。経文に我不愛

身命と申すは、上に三類の敵人をあげて、彼等がのりせめ、刀杖に及んで身命をうばうともとみへたり。又涅槃經の文に寧喪身命等ととかれて候は、次下の經文に云はく「一闍提有り、羅漢の像を作し空処に住し、方等經典を誹謗す。諸の凡夫人見已はって皆眞の阿羅漢、是大菩薩なりと謂はん」等云云。彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云はく「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在て、乃至世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如き有らん」等云云。般泥洹經に云はく「羅漢に似たる一闍提有って而も惡業を行ず」等云云。此等の經文は、正法の強敵と申すは惡王・惡臣よりも外道・魔王よりも破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。されば妙樂大師かひて云はく「第三最も甚し、後々の者は轉識り難きを以ての故なり」等云云。法華經の第五の卷に云はく「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり。諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云。此の經文に最在其上の四字あり。されば此の經文のごときんば、法華經を一切經の頂にありと申すが法華經の行者にてはあるべきか。而るを又國に尊重せらるゝ人々あまたありて、法華經にまさりてをはする經々ましますと申す人にせめあひ候はん時、かの人には王臣等御歸依あり、法華經の行者は貧道なるゆへに、國こぞってこれをいやしみ候はん時、不輕菩薩のごとく、賢愛論師のごとく申しつをらば身命に及ぶべし。此が第一の大事なるべしとみへて候。此の事は今の日蓮が身にあたれり。予が分齊として弘法大師・慈覺大師・善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏などを法華經の強敵なり、經文まことならば無間地獄は疑ひなしなど申すは、裸形にして大火に入るはやすし、須弥山を手にとてなげんはやすし、大石を負ふて大海をわたらんはやすし、日本國にして此の法門を立てんは大事なるべし云云。靈山淨土の教主釈尊・宝淨世界の多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界の菩薩等、梵釈・日月・四天等、冥に加之顯に助け給はずば、一時一日も安穩なるべしや。